

「山科家礼記」における助数詞について

三 保 忠 夫

目次

はじめに

一 用例調査

二 注意される助数詞

三 実隆公記との比較

四 用法の分類

おわりに

一 はじめに

山科家礼記(書陵部蔵本)は、十五世紀、中流公家山科家の雑掌らの手になる、山科家の動静、家職、家職、財政、所領経営等についての記録である。記者は、筆跡から見ても、(イ)未詳Ⅱ「応永十九年の部分」、(ロ)大沢久守「永享二年へ一四三〇」明応七年へ一四九八Ⅱ「(イ)(ハ)以外の部分」、(ハ)重胤Ⅱ「応仁二、文明二、三年(別本)の部分」の三人であるとされる。古来、公家(公卿)・僧侶・神官等による記録は多いものの、こうした家司による記録は珍しく、その当

主の手になる教言^{のりごま}卿記や言国^{とまくに}卿記、言継^{とまつく}卿記、言経^{とまつくね}卿記と共に、中世権門体制の崩れていく室町時代の動静・実態をつぶさに伝える資料として重視されている。

山科家礼記は、助数詞研究資料としても有益である。「山科家は宮中御厨子^{みずし}所で調理される食物を献上する供御人^{くごにん}たちを支配していたから魚介類のことは日記中によく出てくるし、所領のある山科からはやまもも、栗^{くり}をはじめとして各種の果物、野菜が来たから、当時の京都の食糧事情がよくわかる。宇治の市で販売される魚介類の種類も実に豊富で、時代が下るにつれ海産物がふえてくる。」⁽¹⁾とされ、こうした状況に伴って多くの助数詞が見えるからである。

助数詞研究上、山科家礼記(以下、「本資料」という)には、次のような特徴が認められる。

- ① 日常的、現実的な生活の支えとなる物資に関する助数詞が多い。これらは、日常卑近なものであるために、却つて、文字(言語)資料、また、公的記録類に記載されることが少なく、後世に伝えられることも少ない。
 - ② 物資は、果物、野菜、魚介類といった食料や衣類などの多岐にわたる。それらの加工品類も見えており、物資の別名、俗名、通称の類も用いられている。当時の人々の生活の中における助数詞の細やかな使用方法が知られる。
 - ③ 仮名書きの用例が多く、助数詞の、実際に口頭で話されていた形態(実情)がわかる。
- 総じて、他の資料(文献)によっては知り得ない助数詞の用例が得られ、また、その用法(その対象も含めて)が豊富に求められるところに、本資料の価値が認められるのである。

以下に、本資料における助数詞について検討する。依拠するテキストは、『史料纂集』(第一期)所収の「山科家礼記」第一―第五(昭和四十二年十二月―同四十八年十月刊行、続群書類従完成会、校訂、豊田武・飯倉晴武)である。

一 用例調査

本資料における助数詞をリストアップすれば、別表のようになる。但し、ここには、年月日に関するものを省いた。

「山科家礼記」における助数詞について

〔凡例〕 1 助数詞は、底本の表記のままを尊重し、その表記それぞれに列挙する。

2 助数詞は、その表記の内の漢字表記になるものを見出し語とし、「」印に包んで、一段高く掲げた。

漢字表記のない場合、また、あつても宛字や誤字と見られる場合は、私に見出し語を置いた。このような場合はその下に対象語が位置しないから、右とは容易に区別されよう。

3 助数詞のそれぞれの表記の下にその対象語を示す。対象語も、底本の表記のままに列挙する。

4 対象語につき、便宜的に類別することがある。この時、／印を用いる。私に補う語句には（）印を付す。
5 見出し語は、漢字の部首順とする。漢字表記の未詳の助数詞は末尾に一括し、五十音順とする。

本資料においては、多様な助数詞が積極的に用いられているが、一方、それを添え用いない場合も、まま見られる。

○ 私鏡下カミウラシロ、上ハナヒラ十・カキ五・栗十・ネフカ一・タチハナ、ハウウヘハカ、ミチイサキ也、ハナヒラ五・カキ五・クリ十、(延徳四・正・二)

○ ミつかん五十給候也、(延徳元・十二・十二)

○ 餅一器・タコ一・榎・ヤキ米袋一参候也、(長享三・八・一)

○ 武衛下トノ大ニハ鯉一給候、(延徳三・十・二十)

○ 大塚七郎左衛門方へ鯛三・柳一荷遣之、(長享三・五・四)

○ 朽木中将殿よりさゝい五十給候、則たき物かい二かい返事申候、(文明九・三・二十五)

○ 三位入道殿よりくしらのあらまき五給候、(長享三・五・四)

こうした場合、なぜ助数詞が見えないのか、はつきりした理由はわからない。しかし、他の場合、それぞれ「裏」「折」「荷」「杯」「喉」「枚」「懸」といった助数詞が、一定の方法や傾向で使用されていることは確かに看取される。これらにおいて、助数詞を使用することは分かっているながら、何らかの事情でそれらが省かれたものようである。

助数詞の表記には、漢字、平仮名、片仮名の三様が用いられている。数詞を除けば、これらの間に明確な使用区別はないようである。漢字表記には、また、宛字、あるいは、誤字と見られるものが少なくない。次がそれである。それぞれ、上段が正用、下段が所用の宛字、あるいは、誤字と見られるものである。

丁 ^{ちやう}	張	俵 ^{たわ}	表	匹 ^{ひき}	引	帖 ^{てふ}	條	幅 ^{はく}	服
挺 ^{ちやう}	張・丁	管 ^{くわん}	官・巻	足 ^{そく}	束	領 ^{りやう}	兩		

漢字音を、あるいは、和語を介したそれである。「丁」「張」「両」「領」などは混用されている節がある。

なお、ここには「膳^{ぜん}」―「前」も加えられるかもしれないが、他の資料を参看し、今は右から外した。

二 注意される助数詞

助数詞研究上、本資料において注意される用例・用法は、以下のようである。記者三人の区別はしない。また、用例を引くにつき、底本の割り書きをへゝ印で示す。また、必要に応じて、／印でその改行を示すことがある。

〔串^{くし}〕 ヒシ(菱餅か)や串柿などの干物を数える助数詞である。中世の辞書類⁽²⁾では、日葡辞書に、豆腐、干魚、干柿、なまこなど串刺しにしたもの、串鮑、同様の串にさした物を数える⁽³⁾と見える。実隆公記⁽³⁾には見えない。

○ 鏡其上大ハナヒラ十・ヒシノアカキ十串・柿二クシ也、(応仁二・二・三十)

〔丸^{まる}〕 丸薬、糸、紙に用いられている助数詞である。本資料では、わら・馬ワラにも用いられている。

○ 肥州へ馬ワラ十足分七丸遣之、(長享二・正・七)

〔具^ぐ〕 衣装や馬具、道具、薬などに用いられるが、本資料では、具体的な武具・防具が数えられている。

○ 具足一しゆくとハとう・袖・かふと事欸、六くとハ同甲・こて・はいたて・ほうあて・ひたいあて・のとハ・すねあての事六く欸、(康正三・八・五)

○ はいたて三具、のと八、わりすねあて一、(長祿元・十一・十三)

この他、「上さまへ御こき一」(長祿元・十二・二十九)のような例は、ロドリゲス日本大文典にも見えるが、「御下くつ二」(長祿元・十二・五)、「干鯛六具」(文明九・閏正・十八)との例は珍しい。

〔前〕 実隆公記では、「前」で、火箸、魚箸、膳部(御盤・神供等)を数え(また、「膳」で神供や椀を数える)、本資料でも、御供、供饗、火箸を数えるが、餅そのものをも「御かゝみ四前」(延徳三・正・四)のように、「前」で数える。中世の辞書類でも例を見ないが、あるいは、これは、折敷か台かに載せた状態のものであろうか。

〔巻〕 中世には、手本や経典、また、昆布や織物などに用いられる助数詞だが、本資料に「花一卷予給之」(長享二・十七)とも見える。著者の大沢久守は、立花の名手とされ、そうした記事、及び、関連する助数詞も多く見えている。立花のそれを「花一卷」といったのであろうか。それともこれは法花経八巻の内の一巻との謂であらうか。

〔合子〕 合子は、身と蓋からなる小さい容器だが、漆を対象とする器物称量法に用いられている

○ 越知帯刀、漆一合子・鹿皮一枚持来候也、(延徳元・十一・三)

○ ぬつしやへうるし二合子二百五十文分遣之、(延徳三・十一・二十)

〔喉〕 中世には、鯉、鮒、鱸(いろは字、また、実隆公記)、大きな魚(ロドリゲス日本大文典)の一つをこの助数詞で数えるという。本資料にも、鮒、魚、鱸と見えるが、更に、えぞ、えび、鯛、鰯、フナノスシとも見える。

○ 下のまちのふな十二こん、(中略)、廿四こん下、十一こん京二御座候也、ふな十すし二させ候也、(文明十二・二・十)

○ いわし十おけ、えぞ五こん、(長祿元・十二・二十九)

○ かわちより三月ふんの草の代百八十四文、又多ひ二こんのほせ候也、(寛正四・四・十二)

○ いわし四百廿こん、(明応元・十二・十五)

○ つくミニこん、(寛正四・正・五)

○ 伯殿フナノスシ十コン給候也、三コン女中へ進候也、(延徳三・七・五)

えそとは、今日、狗母魚・鱈と書くハダカイワシ目エソ科の硬骨魚の総称で、体長約二十五〜五十センチ、口は大きく体は細長い円筒形でイワシ型、南日本・中国産、美味だが小骨が多く、上等のかまぼこ材料と説明される。本資料では随所に見えており、女房詞にも「一ゑそ。こんもじ。しらなみとも。」とあるほどであるから、当時、よく食されたものらしい。しかし、鰯は、どう見ても「大きな魚」とはいえそうにない。また、えび、更に、鳥の鶉までも「喉」で数えている点には驚かされる。これでは魚鳥に広く「喉」が用いられているかの観すらあるが、これは、多分に通俗的な用法にあるものということであろうか。また、フナノスシに「喉」を用いている。これは、鰯にそれを用いるところからの転用であろうか。助数詞を添えない「フナノスシニ、代五十疋」(延徳三・八・二十)のような例もある。

なお、本資料では、鯛には「枚」、鮭には「尺」を用いている。

〔器〕本資料でも実隆公記でも、多くの用法が見えていて、補い合うところが大きい。

○ 彦衛門予ニ彼箇くゝたち一器くれ候也、(延徳三・二・七)

くゝたち(莖立)は、蔓菁(カブラナの意のアオナ)の苗とする説もあるが(関根真隆氏)、春二月のことであるから、そうした菜の花莖の伸びたもの、いわゆる臺の立った部分で、これを折り取って食用とするのであろう。

〔尺〕鮭、塩引、乾鮭、鰯の類にこれが用いられるのは実隆公記でも同様だが、ここには鰯にも用いられている。

○ 鯛一カケ、タコニハイ、柳一か、三百文也、鱈二、鮑一尺、(文明九・正・二)

鱈も「尺」で数えるから(日葡辞書、ロドリゲス日本大文典、右はそれに引かれての表現であろうか。それとも、当時、日常生活の場にはこうした用法もあつたのであろうか。乾鮭は、鮭の腸を取り去り、素乾にしたものである。

なお、中世の辞書類や実隆公記には、「尺」の他に「隻」も見える。本資料には、これが見当たらないようである。

〔帛袋〕 茶や米を入れた「袋」を数える用例は、普通によく見られる。ロドリゲス日本文典に、茶、干飯、その他、何でも袋（紙の小袋）に入れたものを数えるところから、紙（帛）を素材とするものが通行していたらしいが、ここには、具体的に「ひるのね一帛袋くれ候也」（文明四・六・十七）と見える。

〔帖〕 本資料にも実隆公記にも多くの用法が見えていて、補い合うところが大きいのが、次は、熨斗鮑を数えたものであろうか。これは、「ノシアハヒ百本」（長祿元・十二・七）のように、「本」によるのが普通である。

○ 難波殿産所ヒロメラル、ノシ一テウ給候也、（延徳三・十二・二十八）

〔帳〕 蚊帳を「てう」と数えている。実隆公記に見えず、中世の辞書類にも例は多くないが、合類節用集（延宝八年刊）に「蚊帳」を「帳」で数えるところがある。なお、書札調法記等に、蚊帳は、「張」で数えるとする説も見られる。

○ わたとのへかちやう一てう三百五十三文うけ、（中略）、又一てう百九十一文うけ、二てうなり、合五百四十七文也、（文明十二・五・二）

○ 今日下ものかや二てう、（文明十二・十・二）

〔張〕 中世の辞書類では、紙、弓、琴、琵琶等を数えている。本資料では、そうした例の他に、次がある。

○ 周防守ゆみつる十張二十疋也、（文明十八・九・十四）

○ 鞍カラミ候也、弓ツル二張分、（延徳四・七・九）

弓弦を弓の十張分、また、二張分と書いたものと解釈できなくもないが、このまま、弓弦十本、二本と解することもできる。より古くには、弓弦の七筋を「二張」（いろは字、書簡故実）、「一張」（永代重宝記）といったようだが、書言字考節用集（享保二年刊）では、弓絃、琴絃を「張」で数えている。右は、むしろ、近世的な様相を呈している。

〔懸〕 実隆公記では、これを綱に用いているだけであるが、本資料には、更に多くの用法が見えている。

○ 吉良殿物ノ長櫃一合・辛櫃一荷・御鞍一口・アフミ二懸・輿・火鉢ハン一・御ウツホ二本・矢数（十二）かり又二ま

りね十、〳風呂持参、(応仁二・四・二)

○ めち鳥一かけ、たい三かけ、かゝミ五まい、又小たい卅二まいのふん上候、(中略)かも六かけ代一貫八百文也、(長禄元・十二・二十八)

籠あぶみかは、吊り下げた一对のものとして「一懸かか」というときれるが(日葡辞書、ロドリゲス日本大文典)、本資料では、「鞍一口」に伴うそれであるので、左右の二本(一对)を「二懸」といったものらしい。また、鯛は、個別には「枚」で数えるが、二枚を吊り下げた状態のものを「一懸」という。しかし、本資料では、その一枚、二枚、三枚以上のいずれを単位とするものか、明瞭でない。めち鳥、鴨かも、はい(干したバイ貝か)、かづら(蔓か)などは、吊り下げた一連のものを数えた(ロドリゲス日本大文典)ものであろうか、しかし、これも、その数ははっきりしない。

「手て」 実隆公記では、「剃刀一手」「二手犬追物」と見えるが、本資料では「的矢」(応仁二・二・二十六)を数えている。次も、矢根やのねを「一て」というのではなく、的矢一手(二本)分の矢根、との謂いではなからうか。

○ ひこ七うさき一へいゝとて上候、やのね一てのふん下候、〳(寛正四・二・二)

「把は」 多様な用法が見える。昆布こぶ、青苔せいばい、牛蒡ごぼう、一文字ひともし、大根、はい(干したバイ貝か)、五寸切鱧ごんぎりはむ、粽ちまき、串柿くしがき、その他、具体的な物資・品目が示されている点、貴重である。

「折そり」 食品に関する用例ばかりらしい。本来は食品に限定されるものではない(中世の辞書類や実隆公記)。

「折敷せしき」 やはり、器物称量法の一つで、用例が極めて多い。しかも、食品に関するものばかりのようである。折敷という容器自体、当時の日常生活に親しく用いられていたからであろう。用例中、「鮎あじのすし」と「あいのすし」とは同じものであろう。「き」とは、大上臈御名之事に「一き。ひともし。」と見える、葱きねのことであろうか。

「指さし」 もっぱら指鱈(刺鱈)に用いられる助数詞らしい。中世の辞書類にも実隆公記にも見えない。

○ まちの公事さは六十さし、又かう卅さし、代三百文なり、(寛正四・七・十四)

近世の書札調法記に、「指鯖^{さしざば}へ何指^{さし}」と見える。指鯖とは、「サバを背開きにして二尾を一刺しとした塩味の干物。江戸時代、盆の贈答品とされた。」と説明される。⁽⁶⁾用例中、「御所はすのはのを冊さしまいる、」(康正三・七・十四)、「いお二さし」(寛正四・七・十五)と見えるのは、「はすのはの御たい(台か)さ八人御人数事(中略)以上四十四さし、」(延徳三・七・十五)、「はすハ廿八代四十六文、ハシ三束代卅(文脱か)さ八十八サシ代二百文、」(長享三・七・十四)などから推して、指鯖をいうものであろう。後世、孟蘭盆に蓮の葉に包んで供える供物を蓮の葉物という。この七月半ばの頃には、「はすのは二百五十まい、」(寛正四・七・十三)といった記述も見える。

「提^{ひまげ}」酒器の提^{ひまげ}を数える。中世の辞書類にも実隆公記にも見えない助数詞である。提^{ひまげ}そのものは、初めは水・湯・粥・酒などに用いたようだが(今昔物語集、宇治拾遺物語)、後には、もっぱら酒を入れる道具となったという。

○ 本所へ明日酒一提・干魚進候也、(延徳四・二・二十七)

「本^{ほん}」本資料でも実隆公記でも用例は極めて多く、用法上、共に補い合うところが大きい。本資料の場合、やはり、食品類に伴う用例が多いようである。また、太刀を数える場合、本資料では、「振^{ふり}」「腰^{こし}」の他に「本^{ほん}」も用いている。実隆公記では、「振^{ふり}」「腰^{こし}」だけであり、中世の辞書類でも、「本^{ほん}」は見えない。故実書や書札札において、とうてい認められないような用法が、本資料には、まま見られるようである。

「束^{たば}」中世の辞書類でも実隆公記でも、紙の計量に「束^{たば}」を用いる。「束^{たば}」の基本的な用法の一つであるが、本資料では、この方面の用例は皆無に近く、柴、割り木、折敷^{せしき}、樽^{ぐね}、野菜類、串柿、竹子を対象とする例が多い。

「枚^{まい}」この対象としては、まず、紙、及び、板、皮などがあげられるが(中世の辞書類)、本資料では、用例数としては、かゞみ・はなひら等の餅類や鯛を初めとして食品類を対象とするものが多い。なお、庖丁を「枚^{まい}」で数えた例は日葡辞書にも見えるが、本資料にも、「二條の式部二はうちやう一まい遣候也、」(寛正四・二・二)と見える。

「桶^{おけ}」海鼠腸^{このわた}以下の食品類と酒を対象として多用されている。「一種へクモタコ十連^{じゆ}」一桶^{おけ}(延徳三・十二・四)の類も

酒を意味する。実隆公記にも同用法が多く見られる。日常の生活には、桶が普通に用いられていたはずで、いろは字にも菜桶サイトク、捲桶エヒツケ、縛桶シヤクツケ、請滓桶シヤウサイツケなどに見えるが、中世の辞書類には、助数詞としての登載がない。

「盃はい・杯はい」用字（漢字表記）が明瞭でないのも、しばらくここに置く。日葡辞書でも、用字はわからないが、Ippaiの条に、杯まいやコップ、御器ごぎ、茶碗、鮑貝あわび、殻つきの貝と見える。酒や水に「盃」「杯」を用いるのは普通のことだが、本資料には、蛸たこ、鮑あわび、あかゞい、螺なまこ、がざめにこれを用いている。

○ たこ二はい、（長祿元・十二・二十九）

○ 柳一荷・干鯛五具・あわひ十はい遣之、（文明九・閏正・十八）

○ くつこの物 たい二まい あかゞい十五はい、（長祿元・十二・二十九）

○ 下まちよりにし十五はい、三はい宛出之也、（文明十三・十二・二十九）

○ かさめ廿、はまくり一おけ、今日いたし候也、三はい本所へまいらせ候也、（寛正四・四・二十二）

○ はまくり三おけ・かさめ廿ハイ、（延徳四・二・十三）

あかがいとは、フネガイ科の二枚貝をいうのであろうか。螺なまことは、アカニシ、タニシなどのような巻貝の一群の総称らしい。がざめとは、ガザミ（蛸蛸）のことで、和名抄に「擁劔」に「和名加散女」とある（道円本、卷十九、一四ウ）。

ワタリガニ科の大型の蟹で（幅十五センチ内外）、沿岸の内湾に多く、体色は暗青色で腹面は白、美味とされる。

実隆公記には「烏賊魚五十盃」（大永四・十一・十二）、書札調法記（元禄八年刊）や御家書札大成（弘化二年刊）には「蛸たこ一盃」、都会節用百家通には「鱒魚ますへ一盃」と見え、西鶴（好色二代男）も蛸を「はい」「盃」で数えている。また、運歩色葉集には「一輩イツパイへ蟹カニ」と見える。

この助数詞「はい」については、わからないことも多いが、本資料によって知られるところは大きい。当時、これは、タコ、イカ、アワビ、アカガイ、ニシ、ガザミなどを対象として、結構広く用いられていたようである。

〔盆〕強飯、餅、枇杷、柿、その他の果物、調理済の衣被、大豆煮干、栗味付など、やはり、食品が多い。実隆公記でも同様である。盆も、最も日常的な器の一つであつたろうが、中世の辞書類には、助数詞としては見えていない。

〔筋〕小本結、帯を対象とする用例は、実隆公記にも見えているが、本資料には、次のようにもある。

○ 津田方へはむ五十すち下候、(文明十二・八・十七)

○ 竹やしやの方よりふミ二すち候也、(延徳三・八・七)

○ 忠英所よりきほう百四筋来候、此内ねなし矢廿四也、又きほうの代十疋遣也、(応仁二・三・二)

「はむ」とは、小さいハモを素乾にした五寸切(ハモ)のことらしい。刻んで膾として用いる。これには助数詞「把」も用いられている。「ふミ」は、未勘。木棒(木鉾)は、木、または、竹の棒状の鎌のことで、右はこれを付した矢(及び、これを付さない矢)をいうものらしい。一本の矢は「一筋」というとロドリゲスの日本大文典にある。

〔筒〕「筒」字との書き分けがはっきりしない。対象も重なる。「筒」は、花、油、香など、竹筒に入つたものを数える助数詞である。関連しては、太鼓を「一筒」と数えることもある(「一から一柄」とも)。これに対し、「筒」は、人や荷物(永代節用無尽蔵文久四年刊)に広く用いられるのが普通であるが、茶筌を「茶筌一筒」(都会節用百家通、女文通宝袋文化十五年刊など)と数えた例がある。その素材や形態に関わつてのことであろうか。

○ 小山勘解由仙翁化一筒くれ候也、(文明十二・六・二十七)

○ 京へ草花二筒、すきのは上候也、(文明十二・七・七)

〔管〕実隆公記には色々な種類の筆が見えており、それらを数える助数詞として「管」が用いられている。本資料にも同様の例はあるが、表記は「官」、また、「巻」となっている。但し、筍には「管」と見える。

○ 今朝濃州へ請取二通・筆十官、辻方へ下候也、枝村あき人、(延徳三・十二・二十六)

○ 禁裏ヨリ難波殿筍二管作被申候也、へ十九フへツネノ也、(延徳元・八・十)

〔箱〕 これも日常的な器物に出る助数詞である。中世の辞書類には見えないようだが、実隆公記には、梅、串柿、葛粉、塩、八木、綿を数える助数詞として見える。本資料では、胡瓜、豆腐、米を数える。

○ たうふ一はこ進上、(寛正四・十一・二十九)

〔節〕 鯉節を「節」で数える例は、平城宮跡出土木簡以下、日葡辞書などにこれが見えている。

○ 大こん五十文、五十八八、かつほ一ふし、(中略)、からさけ五尺三百文、(文明十三・十・十三)

別に、「ふしかつほ二」(文明十三・十二・二十九)、「ふしかつほ百」(文明十八・九・二)とも見える。

〔籠〕 瓜の類、その他の野菜、きのこ、果物、餅、炭を対象として広く用いられており、実隆公記と補い合うところが大きい。やはり、身近な日常用品に出る助数詞である。なめすすきとは、エノキ茸の類であろうか。

〔籠〕という単位は、古く、平城宮跡出土木簡や天平宝字六年の雑物出納帳(大日本古文書、第十六卷、八八)、その他に見えている。和名抄にも、「籠」という竹器を「和名古俗用旅籠二字云波太古今案所出未詳」と説明している(道円本、卷十六、八ウ)。これに対し、「籠・(籃)」という言葉(名詞)の文献に確認されるのは、中世に下つてのことらしい(文明本節用集、天正十八年本節用集)。中世の辞書類でも、助数詞のそれを「一籠」、または、「一籠」と読ませるものはあつても「一籠」と読ませるものは、まだ管見にしない。その点、次は珍しい。

○ これハくゝりすミウリ候者にて候、しはすにすミ三か出候、一かこあつかりとり候也(長祿元・十二・六、頭注)

〔粒〕 中世の辞書類では、丸葉や米麦、仏舍利等を「粒」「粒」で数えている。本資料でも同趣である。

○ 今日賀茂祭、あめちまき五十粒、(文明十二・四・二十三)

あめちまきは、粽の一種で餡色をしたものをいう。粽は、別に、「把」で数えている(西鶴には「連」も)。

〔組〕 次のようにして見える。「本所」とは、山科言国をさす。

○ 禁裏ヨリミイロ木式クミ、本所へまいらせられ候也、一くみに十六宛、(文明十八・七・二)

- 禁裏ヨリ本所へ三色木二組被進候、(延徳三・正・二)
- 「三色木」につき、実隆公記には「三尋木五紐」「三尋木半紐」「三尋木一絨」「三尋木三縵」と見える。正しくは、「三尋木」と書く。三尋ばかりの角材で、多く神樂の時、楽人の座とする。
- 「縮」用例は「具」の条に掲げた。「具足一しゆくとハ」と見える。一揃いの甲冑の意のようであるので、中世の辞書類における調査の折には、これを助数詞と認めなかった。永代重宝記(天明七年刊)には「一縮へ兵具」(数量門)、いろは節用集大成(文化十三年刊)には「一縮へ鎧」「一ヒツ縮チヤム」(数量部)と見える。⁽¹²⁾
- 「繰」この漢字表記ははつきりしないが、帯を対象とする貴重な用例である。
- 御西向より帯二十くり被下候也、(長禄元・十二・五)
- 「蓋」菅笠を数える。類例は、西大寺資財流記帳(宝亀十一年)⁽¹³⁾以下、西鶴作品などにも見える。
- 仍大すけかさ一かい麦粉袋算用状在也、(応仁二・六・三)
- 容器の蓋を借用するところに生じた助数詞「蓋」は、実隆公記に見えている。
- 「袋」対象として茶袋が多い。これは一般的傾向に添うもので、その他、小豆、榧、薬などの袋入りを数えている。
- 「栢」「栢」は、榧の実と関係しているかも知れない(本朝食鑑、菓部、榧子)。
- 「裏」栗、蜜柑、熟柿などを手軽く包んだものを数えているらしいが、鯖、鱧、薬玉の糸なども見えている。
- くすたまのいと二つゝみ本所、(延徳四・五・三)
- 「頭」烏帽子、立烏帽子、兜を数える。こうした用法は、なぜか、中世の辞書類には見えないようである。
- いほ腹当三両・かふと二頭上候、(文明九・十一・十)
- 東庄へ弥三郎今朝下、立ゑほし二かしら持上候、御雑色の也、(長享三・六・二十二)
- 平安初期の寺院文書や延喜式では、呉楽面形、師子、冠を「頭」で数えている。実隆公記にも「烏帽子五頭」と見え

る。近世に下ると、「頭巾ずきん 綿帽子わたぼうし一頭ひとつかし」(書札調法記)、「鳥帽子あまほし 一頭ひとつかしといふ」「胃かぶと 一頭ひとつかしへ敵てきにハ一勿はねといふ」(万物用文章)、「胃かぶと へ一頭ひとつかし」(都会節用百家通)、その他の類例がある。

〔連れん〕 多様な用例が見える。乾物や山葵など、糸や串に通したり紐で編んだりした形で売買されていたのであろう。

〔銚てう〕 銚そのものは、本来、物を入れて温める器であつたらしいが、本資料では酒器として見えるようである。

○ 御所へ御いわるのたる一 へ十三銚、(寛正四・正・二)

別には「二種一銚御持参」(応仁二・四・七)と見えるが、これは、肴一種酒一銚の意である。

〔銚てう子し〕 銚子そのものは、酒を注ぐ器、とくり、さしなべのことで、右の銚と同義で使用されているようである。

○ 本所御いわる、さけ十てうし、八十四文へ料足、(寛正四・十一・二)

○ 本所女房衆御祝酒二銚子、(応仁二・二・一)

○ 御かわらけの物一、へくらけ、御てうし／二てうし代自是出候也、(文明十二・十二・十六)

銚も銚子も、器物名(名詞)を助数詞として用いるもので、実隆公記には見えていない。

〔鉢はち〕 対象は、餅、果物、野菜等の食品類に限定されているらしい。中世の辞書類にも見える助数詞である。

〔間けん〕 家屋の軒数をいう。これは、文明本節用集、その他に示されている用法である。

○ 今夕六過ニ此陣屋東三間めのたゞミやもへあかり候也、(文明九・十・六)

○ 西院地藏(中略)茶屋十・二十間計候、(文明十二・八・十)

○ 鳥屋二間より鳥一出之、(文明十三・十二・三十)

〔雙まう〕 文明十一年本下学集や日葡辞書、ロドリゲス日本大文典などによると、瓶子へいびは対をなして「一雙まう」「一對びい」と数える。実隆公記にも、「錫物一雙」「瓶一雙」、また、「錫物一對」と見える。

〔領りやう〕 主に、具足類を対象としてよく用いられている。実隆公記との大きな相違点の一つである。

「山科家礼記」における助数詞について

○ 是之具足数つゝミ腹当四両、をとし腹当三両、同丸二両又つゝミ具足一両、吉腹当一両以上十一両へ此外御タツ腹当二ノ入道殿、予具足別候也、(長祿元・十一・十三)

○ 忠英所ヨリ同丸一領来候、此方裏腹巻取替借遣候也、(応仁二・六・四)

○ 大原へかふと・くそく一両かし候也、(文明十二・四・八)

裏腹当、裏具足、裏腹巻と見えるのは、その表面を綾、緞子、縺子などで包んだ上物である。本資料は、動乱時代に成立している。多くの甲冑、胴丸、腹当等が見えており、これらに伴つて助数詞「領・(両)」が用いられている。

〔駄〕 米穀、海産物、金属、染料、その他の運送物資の荷駄を数える。用例中、足駄と見えるのは次である。

○ あした一駄十文、かち二文、(文明十二・正・二十六)

応永二年度朽木口関率分両様取様案の中に見える一ヶ条で、駄荷と歩荷との両様が記されている。

〔いかき〕 いかきは、物類称呼安永四年刊本に、「筭 いかき○畿内及奥州にて○いかき江戸にて○ざる」(四、四オ)と見える。これを器物称量法として用いたもので、用例は多い。日常的な助数詞であったと見られる。

○ はらひひこ七、二いかき又一いかき、いま一いかきハにしおうちより、せいはん事、(文明十二・三・七)

○ 政所やしきのしふかき一いかき出之、数二百五十計駄、(文明十二・九・二十一)

○ わらひ七郎さへもん三いかき今日納候、一いかきハきたとのゝ分、せんさう坊一いかき出候、きたとのゝ御ふん、(延徳三・三・十三)

〔おし〕 用例は次だが、未詳である。「からさけ」とは、乾鮭でなく、苦酒、即ち、酢のことであろうか。存疑。

○ ひる予七郷へたる七・からさけ一おし□・大こん一おし宛遣之、同おけひしやくてうしそへ候也、(文明十二・十一・六)

〔かはらけ〕 大工の用いる砥粉を素焼きの土器で数えたものである。酒、銅の湯等をも数える(宇治拾遺物語)。

○ めゝかとのこ一かわらけもちきたられ候、(延徳四・正・五)

「からげ」物を結びからげたものを数えるという(日葡辞書)。用例中のハナヒラとは、花卉餅のことであろうか。

○ うはあめ二からけミやけとてくれ候也、(文明十二・十一・二十二)

○ もちい一からけ彦兵衛方遣之、(延徳元・十一・四)

右の、「いかき」「かはらけ」「からげ」なども、極めて日常的な助数詞であったと見られるが、実隆公記には用例が見えないようである。

三 実隆公記との比較

山科家礼記における助数詞の特徴を窺うために、時代、また、位相やジャンルの異なる資料と比較してみる必要がある。しかし、いきなり正倉院文書や延喜式、また、花園天皇宸記や中世文学作品などと比較していくのは、必ずしも有効な方法ではなからう。そこで、以下には、時代のほぼ同じ、しかし、記者の性格の異なる実隆公記と比較してみる。

実隆公記は、公家社会最高の文化人と称された三条西実隆二十歳の文明六年(一四七四)から死の前年八十二歳の天文五年までの六十二年間の記録である(一部欠落あり)。年代上は、山科家礼記に一部重なって後続する形である。

「A」山科家礼記に見えて、実隆公記に見えないもの

串 <small>くし</small>	合子 <small>がふし</small>	希袋 <small>かみくろ</small>	帳 <small>ちやう</small>	折敷 <small>せしき</small>	指 <small>さし</small>	提 <small>ひまげ</small>	筒 <small>こ</small>	節 <small>せつ</small>	組 <small>ぐみ</small>	縮 <small>しゆく</small>	繰 <small>くり</small>	鉞 <small>きり</small>	鉞子 <small>てうし</small>	領 <small>りやう</small>	いか
き	おし	かはらけ	からげ	つ											

右に多を占めるのは食品関係の助数詞である。

「B」実隆公記に見えて、山科家礼記に見えないもの

韻 <small>いん</small>	音 <small>おん・こゑ</small>	階 <small>かい</small>	襪 <small>かひ・たる</small>	號 <small>がう</small>	函 <small>かん・ぼこ</small>	紀 <small>き</small>	基 <small>き</small>	綺 <small>より</small>	簀 <small>き</small>	級 <small>きふ</small>	行 <small>かう・くだり</small>
---------------------	------------------------	---------------------	------------------------	---------------------	------------------------	--------------------	--------------------	---------------------	--------------------	---------------------	-------------------------

「山科家礼記」における助数詞について

礼	輩	紐	唱	縵	脚
列	盤	軸	株	座	曲
聯	筆	帙	炷	才	局
縉	級	旬	歲	軀	驅
封	陣	巡	載	顆	顆
紋	條	順	壯	割	割
柄	滴	聲	草	莖	莖
編	疊	隻	冊	括	括
步	點	尊	匠	夾	夾
舖	董	朶	蓋	篋	篋
名	屯	代	支	戶	戶
流	日	棹	紙	壺	壺
旋	年	端	周	刻	刻

紙面の制約上、それぞれの対象語は省略したが、それでも、多いのは、風流韻事、学問・芸術、香、節句、灸、仏像・
 経典などに関わる助数詞であると知られよう。「A」の一群に比して用例数が格段に多いのは、資料自体の言語量も実隆
 自身の語彙量も多いからであろう。この調査では助数詞の範疇がやや広く取つてあるせいもある。

〔C〕 双方に共通する助数詞

丁	丸	人	俵	両	具	切	前	包	疋	卷	反
口	句	合	喉	*	器	對	尺	*帖	幅	度	回
張	慙	所	手	把	折	拜	振	挺	服	本	束
盃	枚	枝	桶	樽	段	片	獻	瓶	番	盆	*束
筋	筒	管	箱	*籠	粒	結	統	腰	b番	膳	種
色	*荷	蓋	*袋	a裏	a粒	b結	躰	頭	a腰	a膳	b艘
重	*鉢	b間	b雙	a面	首	a駄	騎	bケ	a通	a連	部

右の内、より多様な用法が、山科家礼記の方に見られる場合にa印を、逆に、実隆公記の方に見られる場合にb印を
 付した。a印は「A」に、b印は「B」に、それぞれ次々ぐものである。また、双方に多くの用法が見られ、補い合うと

ころが大きい場合には *印を付した。「手」「蓋」「間」は、実は、双方の間に用法が異なっている。
 なお、ここでは、「匹一疋」「回一廻」「杯一盃」「挺一廷」「杯一盃」など、それぞれを同じものとして扱った。

四 用法の分類

本資料における助数詞につき、これまでではその用いられる対象に重点をおいて検討してきた。そうした助数詞につき、用法（機能・性格）の面から分類すれば、次のようになる。（へ）印は参考にとどまるものである）

(一) 個体そのものの数量を表す

① 数を数える助数詞（性質、形状等による）

(イ) 単数………

丸まる 丁ちやう 張ちやう 粒りゅう 間けん 所しよ 組くみ 面めん 組くみ 領りやう 首しゆ 騎き け づ 色いろ 蓋かき 口くち 句く 喉のど 宇う 尺しゃく 帖てふ 帳ちやう 幅はく

(ロ) 複数

(a) 定数………

(懸) 懸かか 手て 縮しゆく 部ぶ 指さし 番ばん 伊足いそく 雙さう

(b) 不定数………

② 量をはかる助数詞

〔器物による〕…… 俵へう 合がふ 合がふ 子し 器き 希袋かみくろ 折をり 子し 折をり 敷敷 提ひき 提ひき 口くち 盆ぼん 桶かき 樽たけ 樽たけ 瓶びん 盆ぼん 筒つつ 筒つつ 筒つつ

〔処置方法による〕…… 箱はこ 籠かご 袋たい 貝かい 銚子ちやうし 束たば 結むす 荷か 裏うら 連れん 瓶びん 盆ぼん 筒つつ 筒つつ

「山科家礼記」における助数詞について

(二)個体の運動の回数を表す……反度廻拝振服獻番

*分類未詳……おし

「合」「懸」「服」については、今、右のように配した。「盃・杯」(イ蝸等、ロ酒等)、「足」(イ木履等、ロ鞆等)、「番」は、それぞれ分けて配した。「串」「連」など、処置方法によるものとしたが、品物によつては(また、時代によつては)一定数が決まっていたかも知れない。

右を一見するに、「(一)②量を計る助数詞」の比率が高いことに気付かれる。(二)全体の内の三割半ばにも達しているからである。正倉院文書や延喜式のような公的性情の強い文書や法制資料、及び、公家の記録類、また、中国古代の烽燧遺跡・墓葬出土文書、帳簿・遺策の類では、この部分の比率はこれほど高くない。これが高いのは、非公的・私的性情の強い、かつ、叙述型の文体を有する資料である。こうした資料では、生活臭の強い言葉、即ち、口頭語や通俗語を用いることも多い。先の、今昔物語集の、就中、「本朝世俗部」のような場合も、正しくそれであった。日葡辞書にも、この種の助数詞が多く、他の文献・資料では確認できないことが少なくないが、同様に、この辞書には、それだけ日常生活に密接した通俗的な語彙(助数詞)も積極的に登載されているからであると思われる。「(二)個体の運動の回数を表す」助数詞も八例見えている。これも叙述型の文体による資料に窺える傾向の一つである。

おわりに

山科家礼記は、中世史研究のためには極めて重要な資料である。しかし、一方、それだけに、また、当時の京都やその周辺地域における世情、政治・経済、生活等々の諸様態、衣・食・住文化等を熟知した上でなければ、その精確な読解は困難かも知れない。本稿では、助数詞研究の面からその一部を管見しただけであるが、ここには、中世辞書類や実隆公記にも見えない助数詞(「指」「提」「籠」「繰」等)、日常的・通俗的と見られる助数詞用法(「喉」「尺」「張」「懸」「盃」

「領」等）などが、よく用いられていることが判明した。「懸」や「盃」などは、その本来の用法について再考する余地もありそうである。器物名や処置・行為方法などから転成した助数詞も少なくない。本資料に見られるこうした助数詞、また、その用法は、当時の中流階層における生活形態・様式、日常性、更に、時代性をよく反映しており、他の文字資料・記録資料に見えないのは、却って、それ故のことであつたのかも知れない。

注

- (1) 吉田元「中世の光景51」、『朝日新聞』、一九九二年十二月二十六日、十九面掲載。
 - (2) 中世、及び、近世の辞書類については、拙稿「中世辞書類における助数詞について」（『鎌倉時代語研究』、第十六輯、一九九三年五月）による。
 - (3) 山内洋一郎「中世における助数詞について」、『広島文教女子大学研究紀要』、V、一九七一年。
 - (4) 大上騰御名之事、『群書類従』、武家部(二)、第二十三輯、昭和二十六年九月、群書類従刊行会、二二頁。
 - (5) 書札礼、また、故実書については、左記、また、注(一)文献による。
拙稿「近世の往来物・書札礼における助数詞の考察―『女文通宝袋』について―」、『国文学攷』、第一三八号、一九九三年六月。
 - (6) 拙稿「近世の往来物・書札礼における助数詞について」、『島根大学教育学部紀要』、第二十七卷、第一号、平成五年十二月。
 - (7) 『大辞林』、一九八八年、三省堂、九七〇頁。
 - (8) 拙稿「西鶴作品における助数詞について」、『島大国文』、第二十一号、平成五年三月。
 - (9) 拙稿「平城宮長屋王邸宅跡出土木簡における助数詞について」、『国語教育論叢』、第七号、一九九七年九月。
 - (10) 『本朝食鑑』、菜部・榎茸えのきたけの条に、榎茸に似た鼠茸ねずみたけは、「江東では奈米須須岐なめすすきという。」とある（島田勇雄訳注、平凡社刊、二四〇頁）。但し、「江東では」とある点は、問題である。
- (注(8)文献参照。

(11) 関根真隆著『奈良朝食生活の研究』、昭和四十九年五月、吉川弘文館刊、九二頁、その他。

(12) 拙稿「永代節用無尽蔵・いろは節用集大成における助数詞(下)」、『国語教育論叢』、第五号、一九九五年九月。

(13) 拙稿「古文書における助数詞(一)」、『島根大学教育学部紀要』、第二十三巻、第一号、平成元年七月。

拙稿「奈良時代の寺院縁起資財帳における助数詞の考察——古代中国における助数詞に触れて——」、『継承と展開 1』古代語の構造と展開、一九九二年六月、和泉書院刊、一四六頁。

〔付記〕

本研究は、平成九年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))による「日本語における助数詞の歴史的研究」の成果の一部である。

本稿の概要は、先の鎌倉時代語研究会(一九九七年八月十二日、於広島女子大学)で口頭発表させていただき、小林芳規先生からは貴重な御指導をいただいた。記して、御礼申し上げます。

〔別表〕

『山科家禮記』における助数詞

〔表記〕

〔対〕

象 (表記は底本の表記のままとする)

〔丁〕

(昆若、輿、

〔ちやう〕

たうふ、こんにやく、

〔張〕

御輿、御こし、／タウフ、たう(ママ)、昆若、
コンニヤク、

〔串〕↓〔束〕

〔連〕

ヒシ、串柿、くしかき、あまほし(串柿カ)、

〔くし〕

くしかき、にし、

〔クシ〕

柿、串柿、

〔丸〕

わら、ワラ、馬ワラ、藁／長命丸、命久丸、

阿魏円、

〔人〕

御牛飼、ヤネフキ、(犬追物) 人数、

〔俵〕

米、大豆、小麦、麦、

〔表〕

米、大豆、

〔両〕↓〔領〕

御供出車、御車、御くるま、(くるま・すな)、

「山科家礼記」における助数詞について

〔りやう〕

〔具〕

車、

はいたて(脛櫃)、小手、雑色狩衣、／御楽盤
渉調・蘇合、／干鯛、

〔く〕

わりすねあて、籠手、大口、御下くつ、雑
色かりきぬ、指貫、／こき、／蘇合、万秋楽、

万シウ楽、／笙簧すき、

cf. 「六くとハ……すねあての事六く歟」、

「六具大仏」、

〔切〕

〔きれ〕

かう(香)、／かいもちい、ヒシ餅、

〔キレ〕

二ハル(?)、／餅、ひしもちい、かゝみ、

〔前〕

御こき、御供、御くう、はすのはの御たい

(?)、いゝ、もち、御かゝみ、御カゝミ、

はなひら、くきやう、／火箸、

〔せん〕

こき、御くうきやう、うちの御くう、御く

う、御きやう、

〔包〕↓〔裹〕

葉老瘡飲、

〔匹〕

〔引〕

きぬ、

〔巻〕

震(宸)筆(御手本)、手本、あみた経、心経、

御經(壽量品、法華録、/花
たいはんになや、

〔反〕
御念仏、

〔口〕
御鞍、

〔くち〕
へいし、

〔句〕
御連歌、平家、平説、

cf. 「三宮萬句発句」、

〔合〕
折、小折、こおり、横、長横、唐櫃、から

ひつ、小辛横、わりこ、ふの折、栗折、/氷

魚、海苔、/伏見院御手本、御樂記、しゆく

し(宿紙)、/巻数

〔かう〕
くりのおり、しいし、

〔合子〕
漆、ウルシ、

〔喉〕
鮒、

〔こん〕
ゑそ、ゑひ、さかな、ふな、すゝき、いわ

し、/つくミ、

〔コン〕
フナ、/フナノスシ、

麦粉、あめ、梅むぎ、梅ツケ、くろしほ、

黒鹽、茶、宇治新茶、ひきちや、こわいゝ、

コハイ、御コワ、たなやき米、密甘、栗、

ゆて栗、てんかくたうふ、餅、もちい、土

筆、ナスヒ、キヒタンコ、イモ、いもかし
ら、さゝけ、くゝたち(莖立)、/鳥子、ハマ

クリ、サツコ、/かき(花器?)、

宇治茶、ひきちや、くき、

ソハ、

寺社、

〔字〕
ふて、筆、懸絵(懸絵四フク一對)、

〔尺〕
鮭、さけ、鹽引、塩引、しほひき、からさ

け、ふり、鮑、

ひるのね、

〔帖〕
禁中抄・公卿補任、ヘキカン、草子、歌草

子、/引合、杉原、雑帗、さつし、御文帗、

薄白、ウスシロ、ミノカミ、ミのかミ、美

帗、高檀紙、あいやしや帗、/タ、ミ、たゝ

ミ、

〔條〕
さうし、/杉原、

〔てう〕
かミ、さつし、うすやう、/けさ(袈裟、

ノシ、/御コシノ御ハンテウ、

〔帳〕↓〔張〕

〔てう〕
かちやう、

〔幅〕

〔服〕 アミタ (阿弥陀絵)、

〔ふく〕 あミた (阿弥陀絵)、

〔度〕 (できごと、飲酒)、(含む、「三ケ度」「三箇度」「数ケ度」)

〔と〕 (できごと)、(含む、「三とめなり」)

〔廻〕 諒闇、

cf. 「道妙一廻之ため也」(一回忌)

〔張↓〕

弓、ゆミつる、弓ツル、御琴、

〔懸〕 鯛、

〔かけ〕 めち鳥、かも、鯛、たい、こたい、はい、アフミ、／かつら、

〔カケ〕 鯛、フエン (無鹽)ノ鯛、

〔所〕 (弓の「かミよりにてゆう」箇所、関、ソソセウ院、(かいつふり取之、今度祭一物不出候所、(含む、「ソソセウ院四ヶ所」)

〔手〕 的矢、

〔て〕 やのね、

〔把〕 薪、大根、青苔、青海苔、

〔わ〕 はなひら、

〔ハ〕 わり木、つち木、大原木、なわ、ナハ、わ

〔山科家礼記〕における助数詞について

ら、わた、／こふ、コフ、あらめ、青苔、い

ほのあほのり、め、ハシカミ、こはう、こ

んはう、ひともし、大根、大こん、山のい

も、ちくさ、ちいさ、わらひ、はすのは、

はすハ、な、／くしかき、／かき(魚介?)、

はい、こんきりはむ(五寸切鰻)、コンキリ

ハム、／チマキ、／すミ(或は、この「ハ」は

係助詞か)、

蜜柑、栗、柿、青梅、枇杷、蛤、海松、水

貝、ひたい、干魚、鮎、カキ、たうふ、コ

ンニヤク(廿張)、ミヤウカ子、チマキ、鯨

(鵜か)、鷹之ウツラ

鮎のすし、あいのすし、スシ、たうふ・こ

んにやく、(酒の肴か)、魚、サヨリ、生のさ

より、小アイ、アイ、カイノコサシ、クラ

ケ、熟柿、ミツカラ(ミツカン?)、白ウリ

カウノ物、キ(葱?)、

あいのすし、き(葱?)、

キ(葱?)、

(拜礼、揖をいう)、

〔折〕

〔折敷〕

〔おしき〕

〔ヲシキ〕

〔拝〕

〔指〕

〔さし〕 はすのはのを、さは、さハ、いお、

〔サシ〕 さハ、

〔振〕 太刀、

〔ふり〕 太刀、

〔挺〕 らうそく、／ゆゑん、

〔ちやう〕 らうそく、ラウソク、ラフソク、／唐墨、

〔張〕 らうそく、油煙、

〔丁〕 酒、さけ、

〔提〕 葉、

〔服〕 ちや、

〔本〕 御三毬丁、はうきのゑの竹、御ハタサラ、

竹、京のにか竹、から竹、／松茸、松たけ、

唐芋、はす、根深、ねふか、／あふき、十一

文扇、八文あふき、五文扇、うちハ、打輪、

やり(槍)、なかやり、ホコ、御ウツホ、か

らかさ、雨カサ、柱、栗ハシラ、／御かゝり

(懸)の松、御庭の木、くちなし、まゆミ、

しゆろう(棕櫚)の木、白藤、タマツハキ、

密甘、キンカン、芍薬、シヤク薬、菊、／く

わん数(巻数)、／のしあわひ、ノシ、はい(海

〔ほん〕

産物の干し物か)／牛玉、牛玉、／炭、／御さ
うしき(?)、／太刀、

御三きうちやう、あふき、／はす、

cf. この他にも用例があるが、省く。

〔束〕

わり木、木、柴、しは、うすおしき、をし

き、ハシ(簞)、薄白上(cf. 帖)、／大わ

さひ、ニンニク、若菜、ユデ大豆、串柿、

くしかき、かき、竹子、唐芋、／煎氣腸、

わり木、しは、くれ、うすをしき、うすお
しき、わさひ、大豆、ゆでまめ、はしかミ、
なわ、

〔杯〕↓〔盃〕

〔枚〕

タウシ(唐紙か)、引合、短冊、巻数、／蕨

蕨面、御シキ蕨、おもて(たゞミ)、／肉皮、

ニクノカワ、カノカワ(鹿皮)、／ちまき、は

なひら、／干鯛、／昆布、蕨、

たんさく、すミのふた(炭札)、いた、ゑん

まのいた(絵馬板)、／むしろ、鹿皮、／うす

おしき、ヲシキ、／はうちやう、／はすの

は、／おしもちい、もちい、かゝみ、かゝミ、
ほしもちいのはなひら、はなひら、餅、／た

〔まい〕

〔マイ〕

い、干鯛、ひたい、タイ、こたい、杉原、クシ(櫛)、京クレ、鯛、小鯛、梅、梅枝、桃花、巻数、タンク(壇供)打札巻、

〔桶〕

このわた(海鼠腸)、コノワタ、せわた、うるかおけ、ウルカ、鮎鮎、あいのすしおけ、鮎(鮎か)スシ、すし、マススシ、もつ、埋もつ、久喜(莖漬け?)、梅剝、柳、酒、(酒?)、たる(折一合・たる一桶)、

〔おけ〕

いわし、はまくり、さけ、コノワタ、

〔樽〕

〔たる〕

〔段〕

〔たん〕

〔タン〕

〔片〕

〔獻〕

〔こん〕

〔瓶〕

(酒)、(酒)、(酒)、花、立花、(花を活けること?)、cf..「一種一瓶」(応永十九・七・五)

〔番〕

(舞)、猿樂、さるか、鳥、とり、水鳥、鴨、かも(別に「鴨二つ」とも)、カモ、きし、クカノ鳥、

〔つかい〕

とり、すいてう、かも、

〔疊〕

〔疋〕

〔ひき〕

牛、うし、馬、御馬、馬、

〔盃〕

〔はい〕

さけ(飯わんに)、水(なへに)、(酒)(酌の盃)、たこ、あか、い、あわひ、にし、かさめ、

〔ハイ〕

タコ、大タコ、かさめ、カサメ、(酒)(十盃ツ、被聞食)(応永一九・六・一)、

〔盆〕

こわ飯、こわい、餅、あこや(阿古屋餅か)、枇杷、柿、木練(柿)、桃、も、栗、こぶ、きぬかつぎ、なすひ、かううり(江瓜)、唐うり、さ、け二ほし、蕨、なめす、き(榎茸の一種か)、ス、(細い筍か)

〔ほん〕

くりあしつけ、まめ、ゆとう(湯桶、但し、濁酒の入ったものか)、

〔種〕

(酒のさかな)、

「山科家礼記」における助数詞について

cf. :「今夜十種香在之」(文明二・十二・二十)、
「一種〈クモタコ十連〉一桶」(延徳三・十
二・四)、

〔筆〕

〔ひつ〕

cf. :「御かん状お一ひつおほせ下され候
ハ、」(延徳四・七・一六)、

〔筋〕

小本結、こもとゆい、帯、おひ、白エリイ
ト、／はむ(五寸切鯉)、

〔すち〕

おひ、へにおひ、こもとゆい、もとゆい、
腹白(指貫の括り緒か)、いと(御ふく御い
と)、／きぼう(矢の一種)、／ふミ(?)、／さ
うめん、／はむ、

〔筥〕↓〔箱〕

〔筒〕

〔つゝ〕

〔篋〕

〔管〕

〔官〕

〔卷〕

〔箱〕

〔はこ〕

草花、
あふら、
草花、仙翁化、
筆、
筆、ふて、
木賣、
たうふ、

〔ハコ〕

米、

〔節〕

〔ふし〕

かつほ、

〔籠〕

菰、江州瓜、江瓜、五色、丹波うり、ウリ、
木棒、いもから、はつたけ、なめすゞき、
栗、生栗、枇杷、柿、熟子、しゆくし、シ
クシ、密柑、ミツカン、岩なし、／茶、／餅、
もちい、栗粉餅、柿餅、／サ、イ(榮螺、／
丹波炭、

〔こ〕

〔か籠〕

栗、いはなし、／もちい、／ミなこ、／炭、
ひわ(籠字は右に添える。本文に「此籠な
かさ二尺二寸、口一尺七寸在之、かねの物さし
の定也」とある。)

〔かこ〕

〔粒〕

〔りう〕

〔組〕

〔クミ〕

〔結〕

〔縮〕

〔しゆく〕

すミ(炭)、
あめちまき、
めいきうくわん(命久丸)、(米?)、
三色木、
ミイロ木、
(折帚か)、
具足、

〔繰〕

〔くり〕

帯、

〔續〕

哥、

〔羽〕

鶏、

〔腰〕

太刀、刀、

〔膳〕

御飯、

〔艘〕

舟、

〔色〕

〔そう〕

さかな、ウトン・カワラケノ物、カワラケ

ノ物、ノ袍、物のきれ、服〔御服御物具ノ御
単・御柏・御張袴三色〕、アラハカマ、美物、ノ
うち刀、ノカワコ・日記箱、ノ文書、ノ目薬、
腹薬〔命久丸・丁香散〕、薬、

〔いろ〕

ふく〔御ふく御ものゝくの御ひとへ、御あこ
め、御はりはかま、三いろ〕、

〔荷〕

竹、柴、しは、柱、炭以下、炭、すみ、ノ春

〔か〕

ほや、こふ、ワラヒ、若菜、唐いほ〔唐芋〕、ノ
柳、樺、たる、大津タル、ニコリ酒、ノ辛横、
しは、しハ、大原木、ひそはしら〔松曾柱〕、
竹、三毬丁竹、しいし〔伸子〕、すみ〔炭〕、
かちすみ〔鍛冶炭〕、いしと〔石砥〕、かうそ

〔山科家礼記〕における助数詞について

〔蓋〕

〔かい〕

〔袋〕↓〔帡袋〕

(樗)、しゝのかわ(鹿皮)、見二、ノなは、ノ
蕨、わらひ、すゝ、わかな、くゝたち(茎立)、
ゑもき(蓬か)、ひわ(但し「か」の右傍に「籠」、
本文に「此籠なかき二尺二寸・・・・・」)、「籠」
の条、参照)、くり(栗)、やまもゝ(楊梅)、
ヤマモ、ノ鳥、ノはま(蛤)、ノそは、ノ柳、
桶(酒か)、樺、ノからひつ、

大すけかさ、

茶、ちや、チャ、宇治茶、さゝけ、唐納豆、
からなつとう、ほしいゝ、神仏ホシイ、ミ
つこの、御供、かちくり、葉ランシ、さん
せう(山椒)、むきこ、そはこの、柏、栢、
米、ノ葉

〔たい〕

〔ふくろ〕

ちや、
茶、ちや、からなつとう、まめ、あつき、
かや(樺の実か)、こめ、

〔裏〕↓〔包〕

栗、ナツメ、檳柑、ミつかう(蜜柑か)、シ
クシ・クルミ、柿餅、青苔、(対象物不詳)、

〔つゝみ〕 粟、栗、もゝ、さハ・はむ、／くすたまのいと、しゆつかん、

〔つゝみ〕 粟、くしかき、みつかう、／くすたまのいと、蘇合円、

〔かい〕 たき物かい、

〔足〕 きりの木ほくり、こんかう（草履）、

〔そく〕 大そく（？）、／こんかう、／鞆、

〔束〕 こんかう、

〔鉢〕 佛、薬師（摺写）、

〔たい〕 ほとけ、

〔タイ〕 薬師、

〔頭〕 ゑほし、かふと、

〔かしら〕 立ゑほし、

〔通〕 八幡社務状、家領証文、こうほうし文書、

味曾屋文書、水田郷文書、そへ状、請取、

関御奉書（「東」脱）、案文、折昏、（この他を略す）

〔連〕 かつを、カマス、くもたこ、クモタコ、白

鳥賊、鳥賊、するめ、スルメ、ひた物（浸物

か、乾物か）、干魚、ひうを、ヒウヲ、ひう

□（をか）、魚、あみうを、アミ物（コフ・干

〔部〕 魚の類か、／串柿、くしかき、クシカキ、大

原柿、／山察（^{マツ}菱）、わさひ、

法華経、法華、御経、せんしや（法華経の「漸

写」か）、

〔重〕 小袖、御ふく、／引合、／西（井）樓、

〔かさね〕 こそて、／かみ（紙）、／はなひら、

〔へ〕 （弓の「かみよりにてゆう」結び方）、

〔銚〕 たる（酒）、

〔銚子〕 cf. 「一種一銚御持参」（応仁二・四・七）、

酒、

〔てうし〕 さけ（酒）、たる、てうし（酒）、

餅、白餅、すし、ゆて栗、しくし、さゝけ、

なすひ、久喜（茎漬か）、カウノ物曾、

〔鉢（鉢か）〕 ヒシノモチ（菱餅）、

〔はち〕 こわいゝ、もちい、もちい（「五十也」）、そ

は、わらひ、ゑんとう、さゝけ、久花、木

棟（木練こねり柿か）、もゝ、／さつこ（雑喉）、

餅、モ、

〔間〕 たゞみや（畳屋）、茶屋、鳥屋、

〔ハチ〕

〔雙〕

〔さう〕

へいし（瓶子）、

〔面〕 琵琶、ヒハ、かゝみ、ス、リ、

〔領〕↓〔両〕

同丸、湯帷、

〔両〕 腹当をとしし、吉し、いほー？、具足、く

そく、同丸、腹巻、

〔首〕 歌、和歌、詠進、

〔駄〕 米、麦、かき(柿)、かいさう(海草)、うを

(魚)、／しは、ひ物木(桧物木)、あした(足

駄)、くろかね(鐵)、あかかね(銅)、お(苦)、

むらさき(紫草)、こうのはい(紺灰)、布、

かみ(紙)、こき(合器)、たかに、

cf. 「九合升、一駄七斗定也」(文明三・十

二・六)、

〔騎〕 供、

〔き〕 けいこ(警固の騎兵)、

〔キ〕 御供馬、モノ、ヘカサカケ(笠懸)、

○漢字の表記の不詳のもの

〔いかき〕 はらひ(藤)、わらひ、な、くゝたち、せり、

すいき、そは、しふかき

〔イカキ〕 若菜、ヒハ、熟柿、

〔山科家礼記〕における助数詞について

〔おし〕 からさけ、大こん、

〔かはらけ〕 とのこ、

〔からけ〕 うはあめ、あめ、もちい、「い、

〔カラケ〕 ハナヒラ、

〔け〕

〔ケ〕 さいふ(割符)、

〔つ〕

〔ツ〕

(米の)たわらかす、あふら一升七合つゝ(の
容器)、大津タル(酒か)、ミナコ、さい(菜)、
鴨、